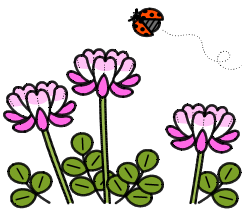

説教要旨「その涙はぬぐわれる」

ヨハネによる福音書 ２０章 １～１８節

十字架上で息絶えたイエス様は、その日のうちに墓に葬られました。それから三日目、日曜日の朝に起こったのがイースターの出来事です。墓の異変に気づいたマグダラのマリアは、ペトロたちにそのことを伝えました。墓の中にイエス様の遺体がないことを確認したペトロたちでしたが、それでも彼らはイエス様が復活したとは思いもしないで家に帰って行きました。そして、一人墓の外に残ったマグダラのマリアは泣いていました。

涙の理由を「わたしの主が取り去られた」からだと訴えるマリアの背後に、復活されたイエス様が立ち、「なぜ泣いているのか。誰を探しているのか」と声をかけるのですが、マリアはそれがイエス様だとすぐには気づけません。マリアが探しているのは、死んで動かなくなったイエス様の亡骸であって、復活して生きておられるイエス様ではないからです。続けてイエス様が「マリア」と呼びかけると、その声でそれがイエス様だと気付いたマリアは振り向いて、「ラボニ（先生）」と言うのです。もはやどれほど望んでも得ることが出来ないと諦めていた、マリアが本当に求めていた、生きたイエス様との交わりが与えられたのです。マリアは喜びのあまり、イエス様に抱きついたのかもしれません。「もうこの方から離れない」そう思ったことでしょう。しかし、イエス様は「わたしにすがりつくのはよしなさい。」と言って彼女の思いを退けます。復活されたイエス様は、いつまでもマグダラのマリアや弟子たちと共におられるわけにはいかないのです。天に上らなければならないのです。

苦しみや悲しみ、心配事の中で、わたしたちはそのことから目を離すことができなくなりがちです。しかしそのわたしたちの背後から、復活して生きておられるイエス様が「なぜ泣いているのか、あなたは泣き止んで歩み出すことができるはずだ」と語りかけて下さるのです。そうして、イエス様に涙をぬぐっていただいたわたしたちは、いまだ涙に濡れている兄弟や姉妹のところへと出かけていって、この喜びを分かち合う者とされるのです。

（２０２２・４・１７　説教者：稲垣真実）